教育コラム「愛のかけはし」：２２８号

令和２年　１０月
江差町教育委員会
学校教育課

『 授業に思う 』

私の職務上、町内の学校を訪問し、先生方の授業を観る機会がけっこうあります。

参観のスタイルには、２タイプあります。
まずは、全部の学級の授業の様子を５分前後の時間で参観するタイプで年に１５回程あります。このタイプでは、授業中の子どもの様子（表情や学習に向かう態度）や教員の様子（表情、話し方、子どもとの向き合い方）について、おおよその状況を掴みます。これらから、教員と子どもの人間関係についてもある程度感じ取ることができます。

もう一つが、１単位時間（小学校は４５分、中学校は５０分）を全て観るタイプです。
教育局指導主事による学校訪問の際の「特設授業」（学校の代表として１クラスだけ１単位時間全てを参観される授業）がこれに当たります。また、公開研究会が行われた際の公開授業も含まれます。

特設授業の学習指導案作成に当たっては、授業者の意図が最大限尊重されますが、前提があります。それは、その学校で組織的に研究している（勉強している）教科等の授業の公開であり、授業づくりの考え方は、その学校の研究部（もしくは研修部）という係から提案された内容等（当然、全教員で検討し納得したもの）を踏まえたものであるということです。さらに加えるならば、学校で研究する内容等は、文部科学省が示す学習指導要領の意図や内容を踏まえることが大前提となります。

特設授業の公開までには、その準備にそれなりの時間がかかります。まず、授業者自身による特設授業の構想を練ることから始まります（おおよそ、公開の３～４か月程前から）。次に、いわゆる「指導案検討」という学習会を２～３回。そして、検討・確認された指導案に沿って、「模擬授業」（教員が子ども役を務め、授業者が本番のように進めていく授業）を行います。通常、模擬授業を通して、一部修正がなされます。

この過程に、教員全員と管理職が関わりますから、特設授業の学習指導案は、授業者個人ではなく、学校全体で考えたものと捉えられます。ですから、その授業の評価は、最終的にはその学校に対しての評価ということになります（もちろん、指導の在り方や、児童生徒との人間関係の状況等は、授業者個人の評価となります）。

さて、最近、授業を観る時の私の視点は、「時間」です。
４５分（小学校）または５０分（中学校）で、計画された指導案通りに学習が進み、予定した時間に終わることができるか？を観ています。

「時間で授業を評価する？！」と聞いて、何か機械的というか冷たい感じを持たれる方もいるかもしれませんが、その理由は、シンプルです。

その時間に予定している学習活動は、その時間で終わらなければならないからです。授業のやり直しはできないのです。もしやったとしたら、そのしわ寄せが後々出てきます。そもそも授業

の計画（指導計画と言います）は、４月から翌年３月までの期間の中で、その学年のその教科で身に付けさせたい力を育成するために意図的・計画的に作られます。授業のやり直しまで想定していませんしその余裕はありません。当初の計算上は多少の余裕はありますが、それは、「学年のまとめ」として、学習内容の定着をさらに確実なものにするために使われるか、感染症による臨時休業のために授業ができなかった場合に備えてのものです。

ですから、予定通りに進み、時間通りに終わることは、とても大事なことなのです。もし、時間に過不足を生じたならば、計画した学習活動に何らかの無理があるか、あるいは子どもの実態に合っていないことになります。もしくは、授業者のやり方に何らかの問題があったと予想されます。

一般的に、学校の授業は、基本的には３つの活動で構成されます。小学校の例で言いますと、最初の１０分を「導入」と呼んでいます。続く活動を「展開」と呼び、３０分程設定します。最後に、「ふり返り」（まとめ、整理と呼ぶこともあります）に５分程。合計４５分です。

ちなみに、「導入」では、子どもの「なぜ？おや？」を引き出し、その授業でやるべきこと（「課題」とか「めあて」）を掴ませると同時に、解決の意欲を持たせます。「展開」では、「課題」を解決していきます。答えを出したり、解決の道筋を見つけたりするなど、基本は自力で解決します。多くの場合、終盤に全体で交流し、解決方法について根拠となる考え等を説明したり、質疑応答をしたりします。このことにより、見方や考え方の広がりや深まりを導きます。「ふり返り」では、その時間で、「何を学んだか」や「新たに気づいたこと」や「次にやりたいこと」等々、ノート等に記述し、いくつか発表または紹介（ＩＣＴ機器を活用するケースが増えています）して終わります。

指導案には、「教師の活動」と「子どもの活動」及び「留意点」という項目があり、時間の経過に沿ってその内容が記載されています。私は、参観の際は、こまめに活動の節目ごとに「〇時〇分」と、時刻をメモするようにしています。

時間通りに終わらない授業の傾向の一つに、「導入」で時間をかけすぎてしまうことが挙げられます。これは、教員であれば、多かれ少なかれ経験があると思います（私も、ありました）。子どもの反応が良く、ついつい時間をオーバーしてしまうのです（または、予想した反応が得られず苦労して・・）。これが、後々まで響くことになります。最も大事な、課題解決の場面やまとめの時間に支障が出てきます。予定した学習活動の質を保障する上で、適切と考えられる時間をあらかじめ設定している訳ですから、その時間が短縮されるということは、授業の質にかかわってくるのです。

予定通りの授業やシナリオ通りの授業を、あたかも創造性のない授業（または面白味のない授業）と主張される方もいると思います。「教師の想定を超える反応が生まれる授業こそ、素晴らしい」と。

磨き抜かれたシナリオによる授業は、予定通りに進み、時間通りに終わります。良い指導案は、学級の子どもたちの実態に応じたものであり、できうる限りの子どもの反応が想定されており、目指すところに向かって、始まりから終わりまでのストーリーとセリフが書かれているのです。

授業者は、「授業中の時間」を、管理・運営する立場にあることを、強く意識していくことが、大事なことだと考えます。